

---

## 「引き退き」はいかなる意味で実践的なのか

——ジャン＝リュック・ナンシーと

フィリップ・ラクー＝ラバルトの提起をめぐって——

安藤 歴

---

### はじめに

1980年から1984年まで「政治的なものをめぐる哲学研究センター」(以下「センター」と表記する)がパリの高等師範学校に設置された。デリダの発案とされるこのセンターは1980年に開催されたデリダについてのコロック «*Les fins de l'homme: À partir du travail de Jacques Derrida*» で提起された政治的なものについての議論を受けて設置された。センターにはエチエンヌ・バリバル、クロード・ルフオール、ジャック・デリダ、ジャック・ランシエール、ジャン＝リュック・ナンシー、ジャン＝フランソワ・リオタール、フィリップ・ラクー＝ラバルト、リュック・フェリーなどの名だたる哲学者が集まった。また『主体の理論』(1982)を著したアラン・バディウが発表者として招かれ、パリ滞在中のジョルジョ・アガンベンも参加していたと言われる。その研究成果は *Rejouer le politique* (1981) や *Retrait du politique* (1983) として出版された。センターでの活動の影響は、出席者の後の著作にも見て取ることができる。

センターはその名前の通り、「政治的なもの」の概念を「哲学的」に探究する場として開放された。このセンターの活動の中心となっていたのが、ナンシーとラクー＝ラバルトだった。彼らはセンターの活動において、(1)哲学的なものあるいは哲学と政治の関係、(2)全体主義、(3)引き退きという3つの論点を問いの対象として提起している。本稿では、センターの開会講演等 («*Ouverture*» と «*Retrait du politique*», およびその付論)において議論される「政治的なものの引き退き」という主張に着目しながら、この3つの論点を整理する。

1980年代初頭には「脱構築と政治」の関係がいかなるものなのかについて表立った議論が提起された。この主題は、前述のコロックで明確に見て取れる。そこでは、後のセンターの活動にとって直接の契機となる議論が行われていた<sup>1</sup>。特に重要なのは、クリストファー・フィンスクとラクー＝ラバルトが行った政治に関するセミナーであろう。このセミナーでの両者の発表はデリダ

---

<sup>1</sup> スリジー・ラ・サールでのコロックについては、その後もこの場で継続される「崇高」についての議論との関連でも注目すべき広がりを持っていると思われる。これについては、Michele Cohen-Halimi, *Stridence speculative: Adorno Lyotard Derrida*. Paris, Payot, 2014 がアドルノの提起から、デリダとリオタールの線で「アウシュビッツ以後」の判断力の問いについて議論を行っている。本稿でも扱う哲学者たちが80年代に持っていた問題意識をより広く明らかにするためにさらなる検討が必要である。

の脱構築と政治の関係、デリダの思想における哲学と政治の関係についてだった<sup>2</sup>。発表においては、後にセンターの活動でナンシーやラクー＝ラバルトが論及する諸々の主題が既に議論されている。このコロックにおいて、ラクー＝ラバルトは68年5月以降の政治・社会状況の中で政治的なものを問い直し、「政治的なものの脱構築」をする必要性について述べている<sup>3</sup>。このような脱構築と政治の「関係」への問いがセンター設置の背景にあった。

では、脱構築と政治の関係を問うという問題設定の中で、「政治的なものの引き退き」がどのように位置づけられていたのか。「政治的なものの引き退き」は、一方ではハイデガーを下敷きにした西洋形而上学的意志への批判を背景にした1980年代当時の彼らの時代認識である。しかし、他方でそれはナンシーとラクー＝ラバルトがセンターの哲学的活動を方向づけるための形式でもあった。すなわち、彼らは、「政治的なものの引き退き」を問うという仕方で哲学的な実践あるいは投企のあり様を追求しようとする。この二つの側面に目を向けることで、彼らが提起しようとした問題系がどのようなものであったのか、その一端を明らかにしたい。

## 1. 政治的なものの概念

「政治的なもの」(le politique)に関わる思想史を簡単に確認しておこう。一般的に「政治的なもの」は「政治の本質」と定義される概念であり、政治(la politique)をそれとして成り立たせるものである。政治という人間の活動が成り立つとするならば、その活動が拠って立つ根拠が考えられてしかるべきである。その根拠が「政治」との差異によって「政治的なもの」と呼ばれ、問いの対象とされる。

ただし、本稿は「政治的なもの」を構成的な概念として捉え、その概念自体の定義を問題とはしない。むしろ「政治的なもの」という概念によってある「政治」を規定しようとするその手法や目的、内実が問われるべきであると考え。その概念の周りに配置される諸概念の連関を分析することが重要であり、そのような構成的概念として「政治的なもの」を捉えることが必要である。

「政治的なもの」が問題となりえるようになった着想の源のひとつは「ポリス的動物」という

---

<sup>2</sup> 1980年代前半にフランスとアメリカ、イギリスそれぞれで脱構築と政治、あるいは脱構築とマルクス主義の関係への問いが提起されるようになった点では、それぞれに共通した問題意識が見出される。Thomas Docherty, « Deconstruction Not Reading Politics. », Martin McQuillan (éds.), *Deconstruction Reading Politics*, London, Palgrave Macmillan, 2008. pp. 32-56には英米圏での脱構築受容において政治的問いが提起される背景が簡潔にまとめられており参考になる。コロックの出発点になったデリダの発表「人間の終わり」はアメリカ合衆国のニューヨークで読み上げられたものであり、最初から英語圏との交渉のもとにあった。セミナーへの参加者には、バーバラ・ジョンソン(1947-2009)やデイヴィッド・キャロル、ペギー・カムフ(1947-)らが参加しており、英語圏で「脱構築と政治」の関係が同時代的に主題になる一つのきっかけとなったのではないかと予想される。

<sup>3</sup> Philippe Lacoue-Labarthe, « Séminaire politique: Intervention », Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe(éds.), *Les fins de l'homme: A partir du travail de Jacques Derrida*, Paris, Galilée, 1981, pp. 493-497, p. 495.

アリストテレスによる人間の定義であろう。もちろん、現在の概念的使用をアリストテレスにそのまま適用することはできないが、少なくとも人間的活動を可能ならしめるものがポリスに見出されており、ポリスとの関係において人間の本性が把握されていたことは指摘できるだろう。ただし、ポリスとはアリストテレスにとってより全体的な概念であり、そこに「政治」と名指されるような種差性を持った領域が見出されるわけではない。これはキリスト教の神の権威の下に「君主の鑑」などの教説で徳に基づいた統治が問題とされる中世まで変わらないといってもいいだろう。政治は他の諸領域、例えば宗教や軍事などと十分に区別され概念化されていたとはいえない。

政治がそれ自体の領域として自律性を付与され始めるのはマキャベリ以降であると言われる<sup>4</sup>。これが道徳や宗教から政治を切り離し国民国家へ舵を切ったと彼が評される所以である。とはいえ、マキャベリの時代にははまだ政治が社会や経済から十分に切り離されてはいなかった。社会や経済は近代において国家から切り離されてることで、種差性を帯び始める。政治がこれらの領域と十分に区別されるようになるのは、植民地主義に伴ってグローバルな経済が拡大し、都市住民が増えることで、伝統的共同体とは区別された全体性としての社会領域が発生し拡大する18世紀以降のことだといえるだろう。このような諸領域の分化にともなって、19世紀には社会や経済を扱う学問として社会学や経済学が政治学とは別の分野として確立されていく。しかし、社会学と経済学がその対象たる社会や経済を分析し「実体化」していったのに対して、政治学は対象を縮小していったと言える。政治学の対象は制度化された政治権力の分析へとシフトし、制度論の趣を強めていった。これは国民国家の成立に伴い、その規範的、制度的な基礎づけを行うためであったと考えられる。アリストテレスにおいて「棟梁の学」と位置付けられていたポリスの学はその対象領域を限定されたのだ。

だが、20世紀に入り、そのようなミニマルな政治の捉え方は動揺することとなる。その理由の一端は「戦争」のように、制度論や政治過程論に還元されない国家を超えた過剰が認識されたからだろう。だからこそ、政治の本質を「政治的なもの」として概念化する必要が浮上した。「政治的なもの」という概念を取り上げ明確に定義付けたのはカール・シュミットである。彼が政治的なものを友敵関係に見出す際に、その典型とされるのは国際戦争や内戦である。シュミット自身の試みは戦争のような例外的状態に主権的決定が可能となる契機を見出し、そこに政治の基礎づけという位置づけを与えるものだった。

例外状態に主権的決定を見出すシュミット主義に対して、アーレントの「政治的なもの」についての思索は現れの領域としての公的空間とそこでの自由な活動を重視する。これは、必要性に基づいた生存のための社会領域から区別され、人間の複数性を前提とした政治の活動が可能になる政治空間である。例えば、アーレントは『人間の条件』(1958)で、近代においては経済学や統計学が人間の行動をパターン化し、このような社会的行動を基準として画一的に人間存在が切り

---

<sup>4</sup> 君主への教育としてあるべき統治のあり方を示す「君主の鑑」というジャンルにおけるトマス・アクィナスとマキャベリのあいだの差異・変容については次の文献を参照。早川誠「政治」、古賀敬太編『政治概念の歴史的変容』所収、晃洋書房、2007年、1-25頁、11-12頁。

詰められていると論じた。社会は「ただ生命の維持のためにのみ存在する相互依存の事実」であり、生存のための労働が支配しているとされる。彼女は近代において勃興した「社会的なもの」(le social)による公的空間の支配に対して、「政治的なもの」を公的な現れの間として対置する<sup>5</sup>。

シュミットやアーレントの力点はあくまで「政治的なもの」の種差性を限定し浮かび上がらせることにあった。社会とも経済とも制度とも違うかたちで政治の領域を確保することを大まかなモチーフとして取り出すことができるだろう。しかし、この背景には、「社会的なもの」による「政治的なものの侵食」についての認識がある<sup>6</sup>。アーレントと同じく、シュミットも『政治的なものの概念』で、「政治的なもの」への「社会的なもの」の浸透を「全体国家」への言及によって問題にしている<sup>7</sup>。固有で自律的な領域たろうとした政治はその区画があいまいとなり、社会が政治を含む包括的領域として拡大する。政治活動はその他の諸活動とともに経済活動と密接に結びついた社会領域に包含され、「政治的なもの」はそれ自体の種差性があいまいとなった領域となるのである。

以上の概観的な論述からさしあたり確認しておきたいことは、次の2点である。「政治的なもの」の概念は「政治」と「社会的なもの」というふたつの領域から区別されるものとして思考されていること<sup>8</sup>。そして、「政治的なもの」の曖昧な領域性をいかに思考するのかという問題が浮上していることである。

「政治的なもの」を問題化する議論の背景には、「政治的なものの消失」の問題化がある。それは「社会的なものへの支配」によって「政治的なもの」が自律的領域としては同定できなくなっ

<sup>5</sup> Hannah Arendt, *The Human Condition* (2nd ed.), Chicago, The University of Chicago Press, 1998, p. 46.

<sup>6</sup> 「ポストモダン」について扱った論者たち(例えば、シュルドン・ウォーリンやリオタール)も社会による政治の侵食をどのように考えるべきかという現状認識を共有していたことは指摘しておきたい。

<sup>7</sup> シュミット『政治的なものの概念』を参照のこと(カール・シュミット『政治的なものの概念』田中浩訳、未来社、1970年)。ソリン・ラドゥ・ククはシュミットの『政治的なものの概念』の出発点にはある「引き退き」の認識があるとする(Sorin Radu-Cucu, « Politics and the Fiction of the Political. », Carsten Strathausen (éd.), *A Leftist Ontology: Beyond Relativism and Identity Politics*, 147-69, Minneapolis, University of Minnesota Press, 2009.)。すなわち自由主義的な19世紀を特徴づける様々な形式での脱政治化によって権威の政治-神学的な構造が失墜し、近代国家が変質してきた一方で、「政治的なもの」は宗教、文化、教育、経済といった「中立的領域」を脅かし、それらはもはや「中立的」ではないものになってしまったという認識である。シュミットはこのような問題意識を背景にして、むしろ「政治的なもの」の自律性を友敵関係に見出そうとするのである。これは、ナンシーとラクー＝ラバルトの述べる「政治的なものの引き退き」と部分的にしか一致していないものの、ラドゥ・ククは彼らが「政治的なものの引き退き」の問いとして「主権の引き退き」を取り上げる際に双方に類似性があると指摘する。

<sup>8</sup> Oliver Marchart, *Post-foundational Political Thought : Political difference in Nancy, Lefort, Badiou and Laclau*, Edinburgh, Edinburgh University Press, 2007, p. 154. マーチャートはナンシーとラクー＝ラバルトの提起した「政治」と「政治的なもの」を「存在論的差異」と類比的に「政治的差異」として定式化し、その思想潮流を「ポスト基礎づけ主義」と名づける。これに対しては、バディウの立場を基軸にしたブルーノ・ボシュティルズが執拗に批判を続けており、注目に値する(Bruno Bosteels, « Thinking, being, acting ; On the uses and disadvantages of ontology for politics », Carsten Strathausen (éd.), *A leftist Ontology : Beyond relativism and identity politics*, University of Minnesota Press, 2009, pp. 235-252. および Bruno Bosteels, *The actuality of Communism*, Verso: London/ NewYork, 2011)。

しまうという認識である。ここに「政治的なものの引き退き」を問う余地が生まれる。ナンシーとラクー＝ラバルトは、近代における政治的なものの浸食に関する議論を前提としながらも、1980年代において社会領域の全体化が古典的な「全体主義」とは違う仕方でも実現されてしまったという問題意識を持っている。彼らは、この新しい全体主義において、その種差性を断言することもできなくなった「政治的なもの」とその「引き退き」のあり方を問う。では、彼らが問いに付す「政治的なものの引き退き」とはどのようなものなのか。

## 2. 全体主義

ナンシーとラクー＝ラバルトが「政治的なものの引き退き」を提起した背景には、当時の社会・政治的状况がある。「68年5月」に象徴されるような政治・社会運動の後退、その遺産が70年代を通して反省される中で現れてきた「新しい体制順応主義」、プラハの春（1968）やアレクサンドル・ソルジェニーツィンの『収容所列島』の刊行（1973～）、カンボジアでの大量虐殺などによるマルクス主義・社会主義の決定的凋落、社共共闘路線の延長線上でのミッテラン政権の成立（1981）とその挫折（1983）、こういった出来事がフェリックス・ガタリの有名な言葉「冬の時代」にあらわされるような停滞期につながる。また、ニクソン・ショック（1971）、第一次オイルショック（1973）、第二次オイルショック（1979-80）、欧州通貨制度の発足（1979）といった経済危機・経済システムの再編が行われ、福祉国家体制が動揺し、新自由主義が勃興するのもこの時期である。こういった現状の認識として、「政治的なものの引き退き」という言葉が用いられていると最初に確認しておきたい<sup>9</sup>。

ナンシーとラクー＝ラバルトは以上のような1980年代初頭の政治・社会の状況における「全体主義」の新しい様相を捉えようとする。彼らは近代を全体主義的な欲望によって捉えている。例えば『ナチ神話』（1991）などで彼らは「ナチスドイツ」での神話に基づくイデオロギー的正当化のメカニズムを分析し、そこに何らかの形象に全体を体現させる意志を読み取っている<sup>10</sup>。これに対して、本稿が読解の対象とする発表原稿では彼らの置かれた現状における全体主義の分析がなされる。この現状認識として、ナチスなどを典型とする古典的な全体主義とは違う新しい全体主義が提示される<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> 70年代から80年代の政治・社会の変容およびそれに応じた知識人の変容と反応については優れた研究が数多くあるが、その中でも François Cusset, *La décennie : Le grand cauchemar des années 1980*, Paris, La Découverte, 2008 が詳しく論じている。

<sup>10</sup> Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe, *Le mythe nazi*, La Tour d'Aigue, de l'Aube, 1991. (『ナチ神話』、守中高明訳、松籟社、2002年)。Simon Sparks は「形象」への意志から存在一神論を定式化しようとする点にハイデガーとは違うナンシーとラクー＝ラバルトの特徴があると論じている (Simon Sparks, « Editor's introduction : Politica ficta », Simon Sparks (éds.), *Retreating the Political*, New York, Routledge, 1997, p. xiv-xxviii, p. xx-xxi.)。すなわち、形而上学は形象化に向かう点において特徴づけられる。

<sup>11</sup> ナンシーとラクー＝ラバルトは「未刊の全体主義」(totalitarisme inédit)と呼んでいる。未だ公開や作品化されておらず秘められているという含意を持ち、従来の全体主義論からすると捉えがたい形態の全体主義のことを指している。ここでは古典的全体主義との対比で便宜的に「新しい全体主義」と呼

彼らはアーレントに従って、(1)労働する動物の勝利、(2)社会的なものによる公的空間の規定または回復、(3)権威の失墜という全体主義の3つの特徴を挙げる<sup>12</sup>。この中でも特に権威の失墜に対する反応が新しい全体主義を過去のそれから分けるものだ<sup>13</sup>。ナンシーとラクー＝ラバルトは従来の全体主義の特徴を「政治体の熱狂的な再本質化」だとする<sup>14</sup>。これらの複合的領域の一体性を政治的に形象化しようとするのが全体主義の特徴である<sup>15</sup>。古典的な全体主義が権威を持った指導者や国家、民族などへの同一化を特徴の一つとするのに対して、新しい全体主義ではそのような権威は形象化されない。これが意味するのは、具体的な対象へ同一化されないものの、かえってそのために同質的な全体性が生じていることだ。全体主義と名指される現象においては、「政治的なもの」は社会領域に遍在化し、それによってその種差性を失ってしまう。ナンシーとラクー＝ラバルトは「政治的なものの種差性」の消滅と政治の全体化を通して、「政治的なもの」が単なる権威主義的な言説と混ざり、社会領域に遍く広がったありきたりのマネジメントや組織の問題となっていると断じる<sup>16</sup>。古典的な全体主義が権威を何らかのかたちで復活させそこに一体化させようとするのに対して、新しい全体主義では強力な権威が生まれえない。だが、それはあらゆる他性が消散してしまうことでもある<sup>17</sup>。そこでは殲滅の対象も、階級的敵対も現れない。この全体主義においては、社会領域が普遍化し権威が失墜し、その現状（世界）の外部を思考することができなくなっている。

これは、リオタールが『ポストモダンの条件』で提起した、「システムへの同一化」から「テロル」が生じるという事態としても考えることができる<sup>18</sup>。「大きな物語」に基づく決定が成り立たず、ローカルでばらばらの行為者に集団的決定の問題やその正当化の地位が求められるようになることで、集団的決定のための「コミュニケーション」という行為遂行モデルを通した「コンセンサス」が重要となる。彼はこの過程を言語ゲームと類比して論じる。テロルとは、科学・技術知を駆使してゲームに影響力を持つテクノクラートたちがシステム全体を統一的なものとして維持するための視点を取り、このシステムが依拠するゲーム上のルールを変更しうる「プレイヤー」をゲーム自体から排除するという脅迫によって同意や沈黙を得ることである。

ナンシーとラクー＝ラバルトはリオタールと同じ問題意識を共有して、彼の言う「それ自体の可能な限り遂行的な統一性を探し求める全体性」に言及している<sup>19</sup>。ナンシーとラクー＝ラバルト

---

ぶことにする。

<sup>12</sup> Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe(éds.), « Le retrait du politique et annexe », Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe(éds.), *Le retrait du politique*, Paris, Galilée, 1983, pp. 185-205, pp. 192.

<sup>13</sup> Marchart, op.cit., p. 66.

<sup>14</sup> Nancy et Lacoue-Labarthe (1983), op.cit., p. 192.

<sup>15</sup> Ibid., p. 192.

<sup>16</sup> Ibid., p. 189.

<sup>17</sup> Ibid., p. 192.

<sup>18</sup> Jean Francois Lyotard, *La condition postmoderne*, Paris, Minuit, 1979, p. 103. (『ポスト・モダンの条件 知・社会・言語ゲーム』小林康夫訳、水声社、1989年、156-157頁)

<sup>19</sup> ただし、リオタールは主に科学者共同体のことを念頭に置いているが、ナンシーとラクー＝ラバルト

は民主主義の不安定性それ自体が原動力となる「危機の民主主義」または「民主主義的危機」を問題としている。古典的な全体主義が「民主主義的危機」に対する反応であるとすれば、同じ危機が「民主主義」それ自体の原動力となるのである。リオタールの議論と結びつけて解釈するならば、民主主義的決定においてコンセンサスを得るために「危機」を煽る言説がシステムに組み入れられる。「危機」についての言説がメディアでもてはやされ流通し、人々により「行為遂行的」に繰り返されていくとともに、その言説が人々を動員するだけでなく人々自身がその言説を正当なものとして認めていくようになることで、それと異質な言説が生じえず、システム自体が強化されていく。こうして、もはや種差的に政治的な問いは提起されず、既に受け入れられたイデオロギー的語法のみが繰り返されるだけとなる<sup>20</sup>。ナンシーとラクー＝ラバルトは共同体の構成員の行動を組み込み作動するシステムの内的調整の作用を全体主義の内容と想定していると言えるだろう。

以上の全体主義論にナンシーとラクー＝ラバルトの「政治的なもの」の侵食についての見解を見て取ることができる。しかし、彼らの議論において特徴的なのは、「政治的なもの」が「社会的なもの」と混ざりあった結果消え去ることは、「社会的なもの」が「政治的なもの」を支配しているというだけでなく、「政治的なもの」の支配をも意味すると考えられている点である。特定の権威に基づく範例的な規定が失効し、政治がミクロからマクロまで様々な位相で名指されうようになり、「すべて」が集合的決定と関連させられる。すべてが政治的となることで政治的なものの種差性は消え去ったが、それはすべてが政治的であるという自明さが受け入れられたことでもある。すべてが自明に政治的であるならば、ことさらに何かを「政治的である」と述べる必要がなくなってしまう、「政治的なもの」は消え去ってしまう。例えば「すべては政治的である」というオデオン座占拠において掲げられた 68 年のスローガンが代表的なものとして挙げられるが、「政治的なもの」は国家制度や政治的権威の形象化から離れ、社会の内に遍く見いだすことができるようになる<sup>21</sup>。「社会的なもの」の領域に「政治的なもの」があふれ出してしまった状況は、「すべて」が政治的になっているという仕方で成就されており、この意味で「政治的なもの」は公開性に付され、普遍化している。このような「政治的なものの自明性」のうちに私たちは囚われている。

ナンシー&ラクー＝ラバルトは 1980 年代初頭の政治・社会的状況の中で、その「社会的なもの」の支配を「全体主義」として特徴づけ、同時にそこに政治的なものの全体化を見出している。「政治的なものの引き退き」は、第一に政治が社会でのありふれた言説に解消され、「政治的なもの」がそれ自体として現れないという事態の現状認識である。「すべて」が「政治的」となることで「政治的なもの」は消え去ってしまう。このような「すべて」を可能にする社会・政治的な意味

---

トはそれをより広い文脈でとらえているという点で齟齬がある。

<sup>20</sup> Nancy et Lacoue-Labarthe (1983), op.cit., p. 189.

<sup>21</sup> Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe, « Ouverture », Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe(éds.), *Rejouer le politique : Travaux du centre de recherches philosophiques sur le politique*, Paris, Galilée, 1981a, p. 11-28, p. 18.

の支配は、政治的超越や他性の「引き退き」であるというのだ。

### 3. 政治と哲学の関係

前節で社会的なものの支配と政治的なものの支配が同時的な現象であることを確認した。次に着目したいのは、ナンシーとラクー＝ラバルトがこの全体主義における「政治的なもの」の普遍化を「哲学的なもの」(le philosophique)の普遍化だと考えている点である。

彼らは、「政治的なものとしての哲学的なものの実現と定立、政治的なものとしての哲学的なものの普遍化(世界化)」と書いている<sup>22</sup>。「哲学的なもの」とは、哲学を規定する「歴史的・体系的な一般構造」、西洋の形而上学を成り立たせてきた条件としての「哲学の本質」のことである。全体主義においては、政治と哲学の本質が同時に実現されている。近代における「政治的なもの」の全体的な支配は、形而上学的プログラムの完成の表象でもある。「全体主義」は社会科学などによって経験的・実証的に記述される現象にとどまらず、むしろ哲学なるものの自己実現であると捉えられなければならない。

このような主張は、ナンシーとラクー＝ラバルトの述べる「政治的なものと哲学的なものの本質的共属」(la co-appartenance essentielle du philosophique et du politique)に関連する。これは「哲学的なもの」を「政治的なもの」が規定し、また逆に「政治的なもの」を「哲学的なもの」が規定することであるとされる<sup>23</sup>。

ここでの「共属」はハイデガー『同一性と差異性』における *Zusammengehören* についての議論を下敷きにしている。ハイデガーは、思考と存在あるいは人間と存在の同一性を、対立的な二項を第三項によって統一するのではない無媒介的な同一性として解釈しようとする。この際に、「共属」(*Zusammengehören*)についての解釈がなされる。ハイデガーは  $A=A$  という同一性についての命題を「Aがある」という存在についての命題へと移行させ、この「ある」における同一性を「共属」として解釈する。ここでは、何らかの同一性を説明するために差異を前提とし、その結節として同一性を問うのではなく、むしろ差異がそこから生まれるような「同一性の本質」なるもの(あるいは「差異としての差異」)を思考しようとする<sup>24</sup>。この「同一性の本質」はパルメニデスの「同じものはすなわち思考であるとともにまた存在である」という一文における「同じもの」に思考と存在が「共属」しているという点から考究されていく。

この意味では、「政治的なものと哲学的なものの本質的共属」とは、「政治的なもの」と「哲学的なもの」の差異の自明性から出発するのではなく、むしろその差異が由来する「同一性の本質」を問題化するための論点であろう。この「本質」を規定し直すことがナンシーとラクー＝ラバルトの目的なのではない。彼らにとってより重要なのは、この政治と哲学の本質的關係をいかに問うのかということである。すなわち、政治と哲学がともにその内にあるような形而上学の原理を

<sup>22</sup> Nancy et Lacoue-Labarthe (1981a), op.cit., p. 15.

<sup>23</sup> Ibid., p. 14.

<sup>24</sup> マルティン・ハイデガー『同一性と差異性(ハイデガー選集10)』大江精志郎訳、理想社、1979年、4頁。



問うことが主張されるのである。

ナンシーとラクー＝ラバルトの本質を問うという身振りは、ハイデガーのように隠された根拠へ立ち返ることを目指すのではなく、むしろデリダがハイデガー自身を批判しながら提起したような「目的＝終わり」を地平とする問いの提起である。デリダは、ハイデガーが主体の形而上学を抜け出そうとしつつも、存在と言葉の間で存在へと近接するという現存在の位置づけによって、「人間の本質」を保護し、「人間的なもの」の内にとどまってしまったと批判する。しかし、デリダによるとハイデガー自身が印づけたこの限界そのものを問うことから、すなはち、存在と近いものとしての「人間」の非本質性あるいは非固有性を問いたすことによって、存在と人間との分離不可能な関係、その共属関係、共同の固有性、それらが動揺する状況が訪れている<sup>25</sup>。すなはち、ハイデガーが「現存在」(人間)によって思考と存在との同一性を維持する目的論的構造が揺らいでいるのだ。

ナンシーとラクー＝ラバルトは、この「目的＝終わり」への問いを政治と哲学の関係に向けている。すなはち、ナンシーとラクー＝ラバルトが提起したのは、政治と哲学の「同一性の本質」をその限界についてあるいは限界として思考することである。このようにして、彼らは西洋において政治と哲学が成してきた体系と歴史の限界を問うという挙措を反復する。

#### 4. 「引き退き」の問い

「政治的なものの引き退き」は、新しい全体主義を特徴付けるものである。つまり、指導者、国家、民族などの「政治的超越」を具現化する対象が現れず、超越や他性が引き退くことで全体性が形作られているという認識である<sup>26</sup>。これに対して、ナンシーとラクー＝ラバルトは、政治的な超越に立ち戻るのではなく、むしろこのような引き退きが政治的な超越をどのように変形させているのか、どのように転位させ、練り直し再演することになっているのかを問うべきだとする<sup>27</sup>。彼らは、「政治的なもの」が引き退くことで、どのような政治的問いが可能になるのかに目を向けようというのだ。

ナンシー&ラクー＝ラバルトが『政治的なものの引き退き』(1983)に付した付論を見てみよう。彼らは政治的なものの引き退きの定義を概略する必要性からこの補遺を作成し、次の3つの異なった意味を挙げている<sup>28</sup>。すなはち、(1)政治的なものの止揚 (*Aufhebung*)、(2)政治的なものの二次化、(3)現前の引き退き、である。(1)は「政治的なもの」が止揚されることだ。例えば、ヘーゲルの国家論のような、「政治的なもの」が国家に体现されそれ自体としては終焉する(あるいは国家が「政治的なもの」を綜合する)というような考え方である。また、(2)は下部構造が一次的であり、それが社会において階級闘争の原因となっている。ここで階級闘争という「政治的なもの」は社

<sup>25</sup> Jacques Derrida, *Marges de la philosophie*, Paris, Minuit, p. 161. (ジャック・デリダ『哲学の余白(上)』高橋允昭・藤本一勇訳、法政大学出版局、2007年、232頁)

<sup>26</sup> Nancy et Lacoue-Labarthe (1983), op.cit., p. 192.

<sup>27</sup> Ibid., p. 193.

<sup>28</sup> Ibid., p. 201-202.

会経済的な領域に従属しそこから派生したものであると考えられる。よって、政治的問題は社会経済問題の解決によって解消されるべきだとされてしまう。上のどちらの立場も「政治的なもの」の解消を帰結する。あるいは、どちらも「政治的なもの」の解消へと向かう目的論的構造を持っており、探求すべき原理を隠し持っているとも言えるだろう。

これに対して、ナンシー&ラクー=ラバルトは「政治的なものの引き退き」を最後のハイデガーの仕方、つまり「現前の引き退き」という観点から捉えようとする<sup>29</sup>。「引き退き」は「消失して現れる行為」(l'acte d'apparaître disparaissant) とされ、現れることと消失することが同時に起きることを指し示す<sup>30</sup>。「政治的なもの」が消え去ることとして現れている。マーチャートが指摘するように、引き退きは「すべてが政治的であるところでは何も政治的であるとは言えない」という全面的現前と消失の同時さを意味しているとも説明できる<sup>31</sup>。

ナンシー&ラクー=ラバルトはこの引き退きから2つの「仮説」を提示する<sup>32</sup>。ひとつは「引き退き」が「政治的なもの」を辿り直すことになるというものである。「政治的なもの」が消え去ることが、逆にその輪郭を辿りなおすことになる。ふたつ目は、この辿りなおすことになる何か別のものは未だ名づけられていないことである。「政治的なものの種差性」が辿りなおされ得るとしても、その辿りなおされる当のものが政治的であるとはいえない<sup>33</sup>。「政治的なもの」は両義性あるいは決定不可能性に留まり続ける。問いによって辿りなおすことで「政治的なものの種差性」を現前させることが目的なのでもなく、またそれは可能でもない。「政治的なもの」が消失しながら現れることに対して、それを十全に現前させようとするのではなく、あくまでそこから問いを練り上げること、いわば答えなき問いを提起することが求められる。

ナンシーとラクー=ラバルトは「政治的なものの引き退き」に「政治的なもの」を問い直す契機を見出す。「引き退き」は「政治的なもの」の掛け金を新しく辿りなおす仮説であるとされる<sup>34</sup>。これは「政治的なもの」を解消するのではなく、むしろそれを「哲学的問い」の対象として未決定なものにとどめようとする戦略である。ここで「政治的なもの」は決定されていない可能性となる。しかし、ナンシーとラクー=ラバルトは「政治的なもの」を未決定性として問うことが、彼らの置かれた状況での「政治的なものの自明性」とは異質な政治的言説を出現させることにつながると考えている。

<sup>29</sup> 柿並良佑がナンシーとラクー=ラバルトの「引き退き」についての議論を詳しく追いかけている(柿並良佑「哲学の再描—デリダ/ナンシー、消え去る線を描いて—」『思想』第1088号、岩波書店、2014年、333-354頁)。また、「引き退き」の概念的理解には次の論文も参照のこと。西山達也「ハイデガーとデリダ、対決の前に——retrait 概念の存在論的・政治的画定——」『Heidegger-Forum』第1号、2007、62-73頁。

<sup>30</sup> Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe, *La Panique Politique suivi de le peuple juif ne rêve pas*, Paris: Christian Bourgois Éditeur, 2013, p. 72.

<sup>31</sup> Marchart, op.cit. p. 64.

<sup>32</sup> Nancy et Lacoue-Labarthe (1983), op.cit., p. 202.

<sup>33</sup> Ibid.

<sup>34</sup> Ibid., p. 192.

## 5. 脱構築の政治

ナンシーとラクー＝ラバルトは「政治的なもの」の問いの提起を単なる「哲学的地位」とは捉えておらず、「哲学の特権」を前提にするようなこともないと主張している<sup>35</sup>。そして、「引き退き」の身振りは「政治的」であり、そこで問題になるのは「アンガージュマン」であるとする<sup>36</sup>。次に、彼らが自分たちの哲学的問いをどのような実践として捉えていたのかを検討してみよう。

「政治的なもの」とは具体的な経験の対象ではない。それはあくまで「思弁」の対象である。つまり、抽象的に問われうる対象であり、具体的に把握できる事象ではない。だからこそ、「政治的なもの」は実証科学に基づいてではなく、あくまで哲学的に思考される。ただし、哲学は政治の本質を把握し、それを方向づけることのできる地位に置かれているわけでもない。形而上学が「政治の本質」「政治の本質」といったものを基礎づけ、政治的本質と相関関係にあるところのひとつの実存をプログラムし創設しようとするのに対して、哲学は「それ固有の権威から外された実践であるかのような」ものであるとされる<sup>37</sup>。哲学的な活動は、ひとつの実践的な活動として捉えられている。哲学は理論の権威から外され、基礎づけるものではないものとして実践されなければならない。そのような哲学的実践がセンターでの哲学的探究の共同体に探し求められたのだ。

「政治的なものの引き退き」は一方で「新しい全体主義」や西欧形而上学の主体性の場について論じたものであるだけでなく、他方で哲学と政治の実践的關係を方向づけるものだ。ナンシーとラクー＝ラバルトはデリダが「人間の目的＝終わり」の冒頭において読み上げた「およそ一切の哲学コロックは必然的に一つの政治的な意味合いを持つ」<sup>38</sup>という文言に「政治的なものと哲学的なものの本質的共属」を読み取る<sup>39</sup>。すなわち、デリダは直接的に政治的な主題に取り組むことに躊躇しているとしても、デリダ自身が行う実践は政治的だと断言し、より一般的には哲学的活動はひとつの政治実践なのだと断言する。この際のデリダは、直接的に政治的主题を取り上げているわけではなく、「政治的なもの」から「引き退いて」いるにもかかわらず、むしろ一般的に政治と区別される哲学的活動こそ政治的実践となっているのだと断言する。哲学と政治はその本質において互いを規定するような限界を成しているのであれば、その限界としての政治の本質を問い、その哲学的な体系を脱構築することは、政治的なものを脱構築することにもなる。それがナンシーとラクー＝ラバルトが提起した脱構築の政治的実践であると捉えられるだろう。

80年のスリジー・ラ・サールでのコロックから、この問題設定は一貫している。フィンスクは、デリダにおける「哲学と政治の關係」は「問いを交わすこと」(correspondance avec la question)から考えられるのであり、このように考えることで「哲学的活動は政治的実践である」という命題

<sup>35</sup> Nancy et Lacoue-Labarthe (1981a), op.cit., p. 13.

<sup>36</sup> Ibid., p. 18-19.

<sup>37</sup> Nancy et Lacoue-Labarthe (1981a), op.cit., p. 17.

<sup>38</sup> Derrida, op.cit., p. 131. (デリダ、前掲書、200頁)

<sup>39</sup> Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe, « Ouverture et Annexe : Textes de l'invitation à la decade », *Les fins de l'homme: A partir du travail de Jacques Derrida*, Paris, Galilée, 1981b, pp. 9-21, p. 21.

の意味を画定することができるとする<sup>40</sup>。フィンスクによると、デリダの哲学的活動は、「問いの共同体」というかたちをとって現れる。すなはち問いを閉じることなく、問いを問いとして保つことが、哲学にとって倫理的な法や政治の可能性に応答することとなる。

ラクー＝ラバルトはフィンスクの議論をまとめて引き継いだうえで、問題となっているのが政治的なものと哲学的なものを不可分に一体化する結合についての問いだとする<sup>41</sup>。すなはち、哲学と政治を包括する形而上学的な場である。その上で、ラクー＝ラバルトは「政治的なものの引き退き」とは、「政治的なものの引き退き」の「問い」であると論じる。つまり、このような引き退きの所作は政治的なものの自明性を問い直すことであるとされる。「政治的なもの」から退くデリダの挙措は、この問いを開くことにあると解釈しているのである。

ラクー＝ラバルトは政治的なものをいかにして脱構築するのかを問いとして提示していたが、その問いは脱構築そのものの政治性がいかなるものかという問いを伴うだろう。政治的なものを脱構築することは、脱構築と政治的なものの関係から脱構築をも政治的に問題にすることと不可分である。「人間の終わり」のコロックおよびセンターの活動を論じたナンシー・フレイザーのまとめに従うならば、「政治的なものの脱構築」と「脱構築の政治」という二つの方向性がある<sup>42</sup>。すなはち、政治の形而上学・主体性の場を脱構築することと、その上で脱構築はどのように政治的であるのかを問う二つの方向性がある。フレイザーはこの二つを対立的に捉えているきらいがあるが、私は必ずしもそう考えない。二つの問いは「政治的なものの引き退き」という問題系に裏表の関係で内在していると捉える方がよい。なぜならば、「政治的なものの脱構築」は、それがいかなる「政治」に帰結するのか、しうるのかという問いと一体だと捉えるからだ。

ナンシーとラクー＝ラバルトは問いの対象だけでなく、彼らの哲学的実践の政治性をも「引き退き」として捉えている。彼らは直接的に政治的議論に向かうのではなく、哲学における政治、すなはち「政治的なものの脱構築」を行う。彼らは「政治的なもの」を「引き退く」ものとして問うとともに、彼ら自身の問うという哲学的実践をも引き退きという形式を取った共同の実践として捉える。そのような実践の場としてセンターは構想されていた。ナンシーとラクー＝ラバルトのセンターでの活動は、それ自体がこうした脱構築の政治であった。

## 6. 終わりに

ナンシーとラクー＝ラバルトに対しては、彼らの立場が「哲学主義」であるという批判がなされることが多い。いわく、「政治的なもの」を問うことは「政治」になりえず、結局のところ彼ら

<sup>40</sup> Christopher Fynsk, « Séminaire politique: Intervention », Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe(éds.), *Les fins de l'homme: A partir du travail de Jacques Derrida*, Paris, Galilée, 1981, pp. 487-493.これは、デリダの「暴力と形而上学」での「哲学の終焉」における哲学者の共同体についての問いに由来する問題系である。

<sup>41</sup> Philippe Lacoue-Labarthe, « Séminaire politique: Intervention », Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe(éds.), *Les fins de l'homme: A partir du travail de Jacques Derrida*, Paris, Galilée, 1981, p. 493-497.

<sup>42</sup> Nancy Fraser, *The French Derrideans: Politicizing deconstruction or deconstructing the political?*, *New German Critique* 33, 1984, 127-54.

の問題設定では、政治の本質を規定する哲学こそが政治の本質であり、政治それ自体の本質を問題とする必要が生じなくなってしまう<sup>43</sup>。むしろ政治を固有に問わなければならない。この批判は、「政治的なもの」を問うというセンターでの彼らの提起に対する反応にすでに明確に現れている。実際に、アラン・バディウやドゥニ・カンブシュネルは同じセンターでの発表で「政治的なもの」への問いを批判していた<sup>44</sup>。彼らがナンシーとラクー＝ラバルトの正確な目論見を読み取っているかどうかにかかわらず、あるいは哲学それ自体の反省的な実践が強調されていようとも、そこにはまさしく政治を問う「哲学」への違和感があっただろう。

私たちは、「政治的なもの」をめぐる歴史的「舞台」を問う必要があると思われる。1980年代初頭にナンシーとラクー＝ラバルトが「政治的なもの」を問うという立場を取ったのはなぜだったのか。おそらく70年代を通して政治が後退していったことが大きい背景となっているだろう。その現状分析が彼らの変質した全体主義についての議論だった。では、その様な状況下であって何をなすべきなのかという問いに対して、彼らは政治への哲学的な問いを立てるよう提起したのだと思われる。政治的言説が凡庸となり、社会的管理のありふれた問題にしかつながらない状況では、そこに内包されない可能性に向かう問いを立てることが、なすべき実践だったのであろう。政治的な主題を取り上げたからといってそれが政治的であるわけではない。むしろ状況によっては「引き退く」ことが政治的であると言いうるだろう。

私たちが「政治」あるいは「実践」を問題にするならば、「誰が」「誰に」「いかにして」という問いに突き当たることになるだろう。では、ナンシーとラクー＝ラバルトが述べる問いを練り上げるのは誰なのか。直接的にはそれはセンターの活動への参加者であっただろう。哲学者たちの共同体に問いを交わすことが期待される。それだけを捉えると、フランス知識人の知的サークル内での活動としてしか考えられなくなってしまう。そうではないと言うためには、問いを開く必要があるだろう。ナンシーとラクー＝ラバルトの求めた共同の実践、問いは、その問いを必ずしも受け入れなかった者たちはもちろんのこと、その問いが直接には届けられなかった人々さえもをも含む共同体における哲学を問うことによってしかなされないのではないか。人民、民衆、大衆、プロレタリア、あるいは未だ名づけられていない集合はいかに、どのような哲学をおこなっているのか。

---

<sup>43</sup> 例えば、Andrew Norris, « Jean-Luc Nancy on the Political After Heidegger and Schmitt. », Peter Gratton et Marie-Eve Morin (éds.), *Jean-Luc Nancy and Plural Thinking: Expositions of World, Ontology, Politics, and Sense*, New York, State University of New York Press, 2012, p. 143-158 や Bosteels (2009, op.cit.)はナンシーとラクー＝ラバルトのような哲学あるいは存在論は政治を思考することができないとする。これに対して、Marchart (op.cit. p.83.)はよりバランスを取った主張をしており、ナンシーの「第一哲学」の主張を念頭に置きながら、哲学はその不可能な地位を要求しなければならないとしている。

<sup>44</sup> Denis Kambouchner, « De la condition la plus générale de la philosophie politique », Jean-Luc Nancy et Philippe Lacoue-Labarthe (éds.), *Le retrait du politique*, Paris, Galilée, 1983 p. 113-158. および Alain Badiou, *Peut-on penser la politique*, Édition Minuit: Paris, 1985.

**参考文献（脚注で引用しなかったもの）**

市田良彦『革命論——マルチチュードの政治哲学序説』、平凡社、2012年。

宇野重規、『政治哲学へ——現代フランスとの対話』、東京大学出版、2004年。

川崎修『「政治的なるもの」の行方』、岩波書店、2010年。

森政稔『〈政治的なるもの〉の遍歴と帰結——新自由主義以後の「政治理論」のために』、青土社、2014年。

——、「〈政治的なるもの〉と〈社会的なるもの〉その対抗と重なり」『社会思想史研究〈社会的なるもの〉の概念特集』No.34、藤原書店、2010年、8-22頁。

Inna Variasova, *At the Limit of the Political: Affect, Life and Things*, London and New York, Rowman&Littlefield, 2018.

Philip Armstrong, *Reticulations: Jean-Luc Nancy and the Networks of the Political*. Minneapolis, University of Minnesota Press, 2009.